

ハイパーインフレへの警戒

跡見学園女子大学教授 山澤 成康

東日本大震災の発生直後、物が極端に少ない時期があった。照明を落としたコンビニで商品がほとんど載ってない棚を見た時、今後は物価が上がるのではないかと感じた。

しかし、その後物資は供給され、平常の状態に戻っていった。個人的な「インフレ懸念」は杞憂に終わる。しかし、今後警戒すべきは、デフレよりもインフレだという考えは変わらない。特に、ハイパーインフレ（非常に高率なインフレ）への警戒はしておいた方が良いと思う。

東京日本橋にある日本銀行の貨幣博物館には、さまざまな紙幣や貨幣が飾られている。その中でも興味深いのは、ハンガリーの高額紙幣である。その緑がかった紙幣には、数字の1が大きく書かれ、幾分悲しげな女性の肖像が書かれている。この紙幣こそ、史上最高額の10 垓（がい）紙幣である。垓という単位は、兆、京の上の単位で、10 垓にはゼロが21 個も並ぶ。

今年出版されたラインハート・ロゴフ著の『国家は破綻する』には、ハイパーインフレの例がいくつも載っている。ドイツやオーストリアのほか、戦後の日本でも起こっている。最近ではジンバブエのインフレが記憶に新しいが、1946年のハンガリーのインフレ率が依然トップで、960,000 垓%だ。

45年5月1日には1ペングだった郵便料金は、7月1日には3ペングになった。3倍である。年明けの46年1月には600ペングに上昇した。ここからの上昇がすさまじく、46年3月に2万ペング、5月に200万ペング、7月には40兆ペングとなったそうだ。

物の需給バランスから考えるとあり得ない数字で、インフレ期待がインフレ期待を呼んだ結果である。しかし、当時の人は、紙幣が高額になっても、ちゃんとお札で取引していたという。

どのような心境で取引していたのか聞いてみたい。タイムマシンがあれば行ってみたい時代の一つである。

日々物価が変わるといのは「悪い冗談」のような話だが、慣れることができるのかもしれない。筆者は、ハイパーインフレの最中の92年にブラジルに行ったが、レストランのメニューがクリアファイルに入れられていたのを覚えている。毎日値段を書き換えるためだ。

ハイパーインフレと呼ばれるこうした現象は、マネーサプライの量や実体経済の動きとは関係なく起こる。国が財政的に破綻して、通貨の信認が無くなった時に起こる。こうしたインフレは、通貨単位を変えたりすると、ぴたりと収まる。

今後、ハイパーインフレがすぐに日本で起こるとは思っていない。ハイパーインフレが起こるのは、財政規律が崩壊した場合だ。財政赤字を補填するために発行した国債の引き受け手が無くなって、中央銀行が国債を引き受ければ、ハイパーインフレの可能性は高まる。

日本の財政赤字は確かに大きいですが、国債は消化できている。財政赤字が大きくても、政治的な混乱があっても、国債の金利が上がらないのは、消費税率の引き上げ余地が大きいからだろう。伝家の宝刀、消費税による増収見込みがある限り信認を失うことはない。消費税率は、他の先進国に比べてかなり低い。消費税を15%程度に上げて国際的にはそれほど違和感はない。

ハイパーインフレは、消費税率を上げた後に来る可能性がある。その後も財政赤字が減らない場合だ。その可能性は低いと見るが、警戒を怠らない方がよいだろう。グローバル金融危機といい、東日本大震災といい、想定外の事が起こるのが普通の世の中なのだから。